

我が国の長寿命化と人生計画



南房総 CCRC 事業研究会 代表
CNCP 個人正会員 廣谷 彰彦

明治元年は、慶応4年（1868）とすることにされており、この稿が載る平成30年（2018）1月9日号のCNCP通信 Vol.45は、ちょうど明治元年から150年目の刊行であることに気が付き、大変な光栄に緊張している。この間の我が国には様々な天変地異、歴史的事案、事件・事故があまたであり、大きな歴史を辿っている。取り上げられる話題は幾らでもあるが、此処ではわが国民の長寿命化を、見てみたい。

平均寿命とは「0歳の平均余命」であり、我が国の例を調べると文献にもよるが、縄文時代、弥生時代、室町時代、江戸時代初期辺りまでは大括りにしても15歳くらいで、20歳に達していない。この大きな原因は、乳幼児の死亡率が高く、我が国では、大正時代辺りまで見ても、乳幼児の死亡率は15%前後とされている。江戸時代には、「7歳までは神の子」と言われて、人間の手を離れているように感じられていた（何かがあっても、諦めるしかない）。

他方、平均余命は「その歳に於ける期待寿命」であり、この様な時代においても、5歳児で20歳程度、14歳を越えると、いきなり余命が40歳、50歳などであった模様。歴史に名を残す方の年齢が60歳、70歳等がかなり見られる。

当時に於ける寿命の支配要因は、感染症（結核、肺炎、気管支炎、胃腸炎など）、食生活、衛生環境などであり、平均寿命も明治時代始め位までは、30~40歳くらいだった模様。それが時を経て、1920年位から感染症への勝利（ペニシリン、予防接種等）、小児医療の充実、栄養状態の改善、健康に係る教育の普及などに加え、妊産婦の対応など、急激に改善してきた。

海外の各国に比較すると、産業革命等によって我が国の先を行っていた欧米各国に対しても、明治以降に追いつき始め、2000年から後は大いに上まわって、2016年の予想では、男80.98歳、女87.14歳となった。文献等を見ると、日本人の平均寿命は、これからも延び続けることが予想されており、近い将来に120歳、或いは150歳になってもおかしくないなどの研究成果も見られる。

大変におめでたいことであり、自然の摂理に対する大きな勝利であると、胸を張らなければならないところ、昨今の世情においては、逆に困ったことになってしまい、困惑しているような、風潮が見られる。この様な状況に対して、経済産業省の若手グループによる検討成果、「不安な個人、立ちすくむ国家」～モデル無き時代をどう前向きに生き抜くか～（平成29年5月 次官・若手プロジェクト）が、様々な示唆を議論している（以下、若手Pとする）。

若手Pに拠れば、“立ちすくむ”とは、(将来展望が暗く、財政的にも厳しいのに、反転攻勢に出られない情況)を指す。これまでの我々には、「教育・仕事・引退」の3ステージで人生を計画し、定年後は「余生であり気まま」と言う概念があった。しかし、その夢のような局面を享受できる年代に到達してみれば、社会制度が全く未整備であり、何をどうすれば良いかもわからない。困惑に直面する”不安な個人“に対して若手Pはまとめの中で、「これから数年以内には、高齢者が支えられる側から支える側へと転換するような社会に作り上げる必要がある」としている。すなわち「知的好奇心やスキル、知識のある定年後の世代の方々には、引退してしまわずに、もっと社会の中心で貢献し続けて欲しい。いま日本はアジアがいずれ経験する高齢化を20年早く経験するのであり、この課題を解決していくのが、日本に課せられた歴史的使命であり、挑戦しがいがある課題である。日本社会が思い切った決断をして変わってみせることが、アジア、ひいては国際社会への貢献にもつながる」、としている。

定年という区切りも世界的に見ると廃止される方向にあり、その原因は、年金制度にあるとされる(例：米、加、英、豪、新、等)。年金制度の逼迫から年金支給年齢を引き上げると、その間の生活は自分で面倒を見る意外に無くなる。一部の職業を除いては、年齢を理由にした解雇は法令で認められない国もあるとのこと。

したがって、これまでに想定していなかった人生の局面が、否応無しに迫ってきており、我々は“立ちすくむ国家”はさておいて、あらためて自らの人生の処し方を積極的に計画しなおして、楽しむ方法を講じたい。すなわち、“支えられる高齢者”から“支える高齢者”への転換であり、その場合の視点は、一般に費用、資産・財産、収入、さらに無形資産の形成と投資とされている。費用には、これから起こり得る生活・健康(病気・怪我)、年金手当額の増減、親族らに拠らない介護の費用等、そして収入、最後に無形資産(家族や友人・知識・健康・など)が挙げられる。

これまでに想定していた年月以上の長い道のりに対して、長生きリスクと称する方々も居るようだが、これから起こり得る状況を、先に示したような各項目に対して、出来るだけ想定・計画して、人生を謳歌するのが、賢いやり方ではないでしょうか。私も、精一杯に頑張りたい。

